未来を創る一員として～温泉宿に生まれて～

竹田市立竹田中学校３年　　渕　心音

雄大な自然が広がる阿蘇くじゅう国立公園。その一角をなす大船・久住・黒岳の三山が鎮座する麓の小さな町に私の自宅はある。今から三十五年程前、温泉が大好きだった曾祖父が、「家の風呂を温泉にしたい。」その一心で、源泉を掘り当てた。湧き上がった温泉を見た瞬間の曾祖父の表情はまさに、喜色満面だったそうだ。ほどなく、そこに民宿を営むようになったが、夏は合宿、春秋は登山、冬は湯治客を中心に賑わいを見せる。私もお皿洗いの他、お風呂掃除を手伝っているが、お客さんから「お湯、気持ちよかったよ～。」と言われると、最高の気分になって、家業が温泉宿で本当によかったなと感じる時だ。

さて、税について学ぶと、我家が皆さんから消費税や入湯税といった大切な税金を預かっているのだと強く意識するようになった。そこで、入湯税について調べてみた。入湯税の歴史は案外古く、江戸時代から既に幕府が民衆に対して課していたことを知った。また本市では昨年およそ十一万もの入湯者があり、千七百万円程の税収と、それが、観光案内板の設置や観光の広告料といった観光客誘致事業全般、山桜植林事業等に使用されたそうだ。市の税収割合としては僅か一％程度だそうだが、来訪者の税が、次の旅人のために活用されていること、基幹産業が農業と観光業である故郷にあっては、その発展に役立てられているのだと分かった。父は「入湯税という特別な税を納めさせて頂いているが、それで社会参画できている気がしてとても嬉しい。」そう私に話してくれた。その言葉を聞いて、何だか私まで嬉しい気持ちになった。

さて、私は二年前に体調不良を起こし、その原因が「小児がん」だと判明した。長期入院し、不安な毎日を過ごした。抗癌剤投与や放射線治療を受けたのだが、その影響で、吐気や腹痛に襲われることもしばしばだった。この治療には、月だけでも数百万円はかかる高額なものだったが、税のお陰で先進医療が受けられ、今では随分と元気を取り戻せた。治療はこれからも続けねばならないが、身をもって税の有難みを感じる経験だった。

遠く風土記にも記録されている郷土の温泉。つまり温泉が、古より誰分け隔てなく万人の心と体に癒しや温かさを与え続けてきたということだ。入湯税は、町の活性に繋がり、旅人から次の旅人のために使われる。そして、税は人の命をも救う。温泉と税を照らし合せてみると、両者はとても似ていると私は思う。何人にも平等に還元され、安らぎや癒しをもたらす温かな存在であるからだ。故郷の雄大な自然とその恵みに感謝しながら、これからも一生懸命お風呂を磨こう。入湯税を預かる家庭に生まれた一員として、家業への誇りを抱きながら。そして、名も知らぬ世の中の困っている誰かを笑顔にできるよう、立派な納税者になろう。私の命も助けてもらったのだから。未来の社会を創る一員として。